

教育者としての小林宗作の成長の過程 — 5人との出会いをとおして —

松本晴子¹

本稿は、小林宗作と中館耕蔵、岩崎小弥太、真篠俊雄、黒柳徹子、早坂禮伍との出会いとかかわりに着目し、小林がどのような影響を受けたか、支援を受けたか、影響を与えたかについて検討しながら、音楽教師として教育者として小林が深まっていく過程について考察したものである。

その結果、小林はこの5人との出会いによって、音楽教師として教育者として深まり成長していったことを確認した。具体的には、東京音楽学校乙種師範科入学と成蹊小学校ほかに勤務することになったいきさつ、渡欧する機会を得た経緯、小学校長・大学附属の幼稚園長・小学校部長としての小林の言動が児童や学校運営者を支えたことなどからである。

また、日本の幼児教育分野におけるリトミック教育の創始者、普及者としての小林の功績に加え、小学校の音楽教師としての実践や教育観から音楽指導への示唆を得るものも多いことが導きだされた。

Keywords : 小学校音楽教師、出会い、音楽指導、リトミック、教育者

はじめに

小林宗作（以下小林）は、日本の幼児教育分野へのリトミック¹⁾の普及者として位置付けられていることから、小林についての研究の多くは、リトミックをテーマとして論じられてきている²⁾。

一方、一般の人々の間に小林の名が広く知られるようになったのは、『窓ぎわのトットちゃん』³⁾である。ここには、トモエ学園の校長先生としての小林が描かれている。

本稿ではこれらをふまえながら、これまで研究対象として詳細な形で論じられることは少なかった小林が影響を受けた人々、小林から影響を受けた人々に着目し、考察を進めていくことにしたい。

資料とするのは、小林自身の記録、随筆、論文、著書と『東京音楽学校一覽』などの一次資料、および小林に関するこれまでの研究のなかでもっとも総括的で充実した内容となっている佐野和彦⁴⁾による『小林宗作抄伝』⁵⁾、小林の幼児教育におけるリトミック導入の草創期について論じた小林恵子の論文⁶⁾、などの二次資料である。これらと

その周辺の資料に基づいて、小林と中館耕蔵、岩崎小弥太、真篠俊雄、黒柳徹子、早坂禮伍との出会いとかかわりを整理しながら、小林が音楽教師として教育者としてどのように深まっていったのかを明らかにしていくこととする。

1. 小学校音楽教師としての出発

小林の教育者としてのスタートは、小学校の代用教員であった。その後訓導⁷⁾となり、今日の小学校の教師となった。さらに音楽教師、いわゆる音楽専科⁸⁾教師になるまでに、どのような経緯を経ていったのか、中館耕蔵との出会いと東京音楽学校乙種師範科入学をとおしてたどってみる。

小林は明治26(1893)年6月15日に、群馬県吾妻郡元岩島村三島大竹の農家に5人兄弟の末子、三男として生まれた。後の昭和初め頃に岩島村岩下大村の金子家に嫁いだ長姉の養子となり、「金子宗作」となるが、著作物や仕事の関係はほとんど「小林宗作」の名前を用いていた⁹⁾。すぐ上の兄、次男の長十郎は、高崎師範学校¹⁰⁾出身で卒業後、高崎市内の小学校に奉職したが、末子の宗作は師範学校には進まず、高等小学校¹¹⁾を

1. 宮城学院女子大学

卒業してから、明治40(1907)年、群馬県甘楽郡の下仁田小学校で代用教員として小学校教員生活の第一歩を踏み出した。その後、検定試験によって教員免許を得ている。おそらく小学校の担任教師をしながら音楽教師になる夢を持ち続けたのだろう。音楽教師となって音楽指導に取り組みたいと考えるようになった根底に「特に音楽が好きで、子どもの頃は、よく家の前の川辺で指揮棒を振ったり、歌ったりしていた」(佐野1985, p. 42)ことがあげられる。小林は音楽が好きで唱歌を歌うことを得意としていたことが推測される。しかしながら、「当時はピアノがある家庭は非常に珍しく、群馬県の山地でピアノがあるところといえば学校だけ」(佐野1985, p. 44)であったことから、小林が音楽の素養としての基礎的な技能や知識を身に付けるには限界があった。音楽教師になる希望を持ち続けていたものの、実現するためには、どのようにしてどんな音楽の技能を身に付け、音楽の知識を深めていくと良いのか思いあぐねていたのではないだろうか。小林が高等小学校を卒業し、下仁田小学校代用教員となった明治40年頃、東京から演奏家が来て下仁田小学校を会場として音楽会が開かれていたようである。この音楽会で聴いた研鑽を積んだ歌声や楽器演奏¹²⁾に魅了され、音楽教師になる決意を確かなものにしたのかもしれない。

明治44(1911)年、音楽教師になるために東京へ出て、東京市新宿牛込小学校教師として勤務しながら、東京音楽学校(現在の東京芸術大学音楽学部)入学をめざし勉学に励むこととなる。当時東京音楽学校には、本科(声楽部と器楽部)と師範科があり師範科には修業年限が3箇年の甲種と1箇年の乙種¹³⁾があった。乙種師範科は1年間ではあったものの、入学するのは大変厳しかったようである。小林は乙種師範科入学を目指していたが、思うような成果が得られず苦労していたと思われる。そんな時期、大正4年頃に、小林は高崎で開かれた音楽会を聴く機会に恵まれる。その音楽会の企画に携わっていたのが、中館耕蔵(以下中館)である。

中館は、明治28(1895)年9月3日、岩手県遠野町(現遠野市)の名家遊田家の三男として生まれ、幼児期に中館家の養子となった。明治43年学業を終えると、その年の7月から大正2年7月まで4年間、岩手県上閉伊郡土淵尋常高等小学校教員として勤務するが、まもなく職を辞して上京する。中館が小学校教師を辞し上京したいきさつについての詳細な記録は残っていない¹⁴⁾ものの、上京後、遠縁の紹介で神田の東京楽友会でヴァイオリンを習ったこと、大正4年に神田の学友会有志で音楽会を行うことになり、地方のまとめ役を担い、高崎と沼津で音楽会を開いたこと、大正4年10月には宮内省式部職楽部教師有志と共に東京興楽会を組織し、音楽教授をしたという記録がある¹⁵⁾。以降中館は、67年の永きにわたり、音楽教育の振興につとめた。とりわけ日本の私立音楽大学のなかでは、多くの音楽家、音楽教育者を輩出している国立音楽大学(くにたちおんがくがく)の創立に関わり、国立音楽大学の経営担当、後理事長として発展に尽力している。

国立音楽大学の経営にあたっては、発足当時、財政的には豊かとはいえないなかでも、良質な音楽の演奏や音楽研究の探究心には強い拘りを持ってあたった¹⁶⁾。昭和24(1949)年国立高等学校、国立中学校設立、昭和25(1950)年2月大学に教育音楽学科設置、同年7月附属幼稚園設立、昭和28(1953)年附属小学校設立と現在の国立音楽大学の基礎を築く牽引車となって活躍する。

小林は中館の企画した音楽会を通じて中館と面識を得たことによって、音楽教師になる夢を実現させるために必要なことについての助言を受けることができたのではないだろうか。そして、東京音楽学校に関係のある声楽家に発声や歌唱の指導を仰ぐなどを行ったと推測する。小林の長男金子巴が、「東京へ出て来て東京音楽学校へ入ったのは、中館先生のお世話になったのではないかと思う」(佐野1985, p. 44)と語っていることから、中館と出会うことがなければ小林は、音楽教師になりたいという憧れを抱きつつも、実現できない状態が続いていたかもしれない。小林は音楽会で

出会った以降も時折中館と交わり、音楽教師としての実情やリトミックに関心を持ち精力的に研究していることなどを報告していたと思われる。

一方中館は、音楽指導への情熱と意欲を持った小林と出会い、支援したいという思いに駆られたのではないだろうか。高崎での音楽会の出会いから両者の信頼関係が築かれていったことが確認できることとして、後年中館が国立音楽大学理事長として運営にかかわり、大学に教育音楽学科を設置したり、附属幼稚園を設立したりなどを進めるにあたり、小林を招聘したことがあげられる。二人を引き寄せた要因の一つとして、小林が中館より2歳年上でほぼ同世代だったということ、中館も小林も養子となっていることなど同じような境遇であったこともあるのだろうか。

東京に出て5年後、中館と出会った翌年、大正5（1916）年23歳の時に、小林は東京音楽学校乙種師範科に入学し学ぶこととなる。大正5年の乙種師範科入学者は、14人（男9人女5人）であった。出身地は東京、静岡が3人、岩手、茨城、滋賀、鳥取、島根、福岡、熊本、群馬が各1人で、小林の出身地は本籍地の群馬県になっている¹⁷⁾。

『東京音楽学校一覽 自大正五年至六年』によると大正5年の東京音楽学校乙種師範科の入学試験学科目は、1. 唱歌（小学唱歌集初級ノ程度）、2. 国語、3. 日本歴史、4. 地理、5. 算術となっている。選抜は、「第一ノ試験ニ合格シタル者又は第一乃至第五ノ学科二就キ試験ノ上之ト同等以上ノ学力を有する者タルヘシ」とあることから、唱歌が上手であることが合格の第一条件であったこと、入学してからの授業科目を考慮すると、ほとんどの受験生が第1の試験科目である唱歌を選択したであろうことが推測される。小学唱歌集初級曲集には、《かをれ》《蝶々》のような比較的易しい楽曲と、《蛭》（現在の《蛭の光》）、《うつくしき》、《思ひいづれば》などのように音域もある程度広く難しい楽曲も含まれている。

そもそも乙種師範科は、小学校の唱歌教員、音楽専科教員を養成するというねらいがあったこと

から、大正5年のカリキュラムの音楽に関する科目をみても、唱歌が10時間と多く、音楽通論は2時間、音楽教授法¹⁸⁾は第三学期に1時間、オルガンは3時間であった。一週間の時間割がどのようなものであったかは今後の調査によることとしても、唱歌の時間が一週間に10時間ということは、毎日2時間ほど歌唱の時間が設けられていたと考えられ、合わせてオルガンの時間が一週間に3時間行われていたということは、授業に備えた実技の練習時間を相当要したことであろう。この時代に東京音楽学校に入学する師範科の学生には、個人でピアノやオルガンなどの楽器を所持していない場合も多かったようで、楽器貸付規則などが定められている。おそらく小林も一生懸命練習したと思われる。

大正6年3月東京音楽学校師範科乙種を卒業した小林は、同年4月から同大学選科¹⁹⁾の唱歌専攻に進み唱歌法についての研鑽を積みながら、同時に東京府千寿第二小学校（2002年より足立区立千寿小学校）へ勤務した。その後大正7年8月に東京市山吹小学校に転勤し、大正9年には公立小学校から成蹊小学校に移動している。公立小学校の唱歌教師をしながら、東京音楽学校選科唱歌に在籍し、唱歌の技能と知識を深めていたということは、唱歌の技能を磨くことに意欲的であり、音楽への飽くなき探求心を抱いていたことが伺える。

東京音楽学校の選科唱歌の在籍名簿には、大正10年度まで小林の名前が記載されているが、大正11年度には見当たらない。修了者名簿の大正10年7月、大正11年3月、7月にも見当たらない。修了に至らなかったのは、成蹊小学校に勤務することになり、仕事と学業の両立が難しくなっていたこと、海外の音楽教育に目が向くようになってしまったことなど様々な理由が考えられるが、小林の真意は定かではない。東京音楽学校の学則で選科の修業年限は満5年以内の在籍と決められていたことから、5年間在籍していたことは在籍名簿から明らかである。

2. 音楽教師としての悩み

東京音楽学校で学び、憧れの音楽教師として理想を持って公立小学校で勤務を始めた小林であったが、私立の成蹊小学校に移籍することになる。そのきっかけは、次節で取り上げる真篠俊雄との出会いによると思われる²⁰⁾。ここでは成蹊小学校で取り組んだ音楽指導について検討しながら、岩崎小弥太と出会った経緯について探ることとする。

成蹊小学校は大正4(1915)年、中村春二(以下中村)によって創設された。成蹊小学校の由来について、成蹊学園六十年史に掲載されている中村が記した設立趣旨から触れておきたい。

「教育に関する理論や技術の研究は、今日のところ可(ママ)なり進歩しているように思います。しかし、実際の方面を見ると、遺憾に思うことがはなはだ多いのは心細い次第です。(中略)六カ年の基礎教育さえうんとやれば、中学に行っても大丈夫な筈です。こういう訳で、私は小学校の教育をしっかりと見て見たいと思ったのです。これが成蹊小学校を設立した第一の要因です」(1973, pp. 208-209)。

「(前略)成蹊小学校では、入学の第一日目から、毎日毎日、遠足させるつもりです。自主自立の精神を確立させるには、遠足がもっともよいと信ずるからです。つぎに、何事にも自奮自励の精神をもって当たらしめ、自分のための教育だということを、小さい時からしっかり会得させたいと思います。教育は、自分自身の発達進歩のために、自分から進んで受くべきものだということが、本当に分かりさえすれば基礎の教育は成功したと思つてよいと思います。ですから、自学自修の習慣を確立させるということが、小学校教育の根底です。この根底をつくるのが、わが成蹊小学校の使命であると考えます(後略)」(1973, p. 209)。

日本の教育が個性を無視した画一教育に陥っているという現実直面した中村は、自由な立場で真の人間教育を行いたいとの思いで学生塾「成蹊園」を開塾、その後成蹊実務学校、成蹊中学校、

成蹊小学校などを創設していく。小学校においては少人数制、日記指導、凝念²¹⁾などの特色を生かした教育を行い、これは現在も踏襲されている。

この中村の考えに共鳴したのが岩崎小弥太(以下岩崎)と今村繁三(後の今村銀行頭取)であった。中村、岩崎、今村は東京高等師範学校(現筑波大学)附属中学校で出会い親友となり、それ以降中村のよき理解者となつて、経営基盤を支え続け、成蹊学園を支援した。

周知のとおり岩崎は土佐藩出身の岩崎弥太郎の弟弥之助の長男である。弥太郎が創立した三菱商會を基盤に、第二次大戦GHQによって解体されるまで続いた三菱財閥の4代目社長として、また三菱重工業創業者として活躍した。岩崎は成蹊学園のために吉祥寺に約8万坪の土地を購入し1938年に寄贈したり、元箱根の岩崎家のゴルフ場だった土地6.3万坪を寄贈したりなどしている。資産、資金の援助だけでなく成蹊の卒業生を三菱に受け入れることもしている。まさに成蹊学園理事長として学園の経営と発展に大きく貢献したといえよう。この背景には岩崎自身がケンブリッジ大学に留学し、個性を尊重しながら自由な雰囲気の中で行われている英国の学校教育に衝撃を受けた²²⁾ことも一因と思われるが、中村の自由主義、個人主義の教育理念に心から共鳴していたこと、中村と岩崎の関係がいかに深いものであったかを物語るものでもある。岩崎は成蹊学園に全面的な支援を行ったのである。

また岩崎は西洋音楽に対しての造詣も深く、チェロを習い、東京フィルハーモニック会²³⁾の後援者であった。このことから西欧に留学を志す留学生への援助も行っており、山田耕筰、そして小林も援助を受けた一人であった。

個性を重視した柔軟な自由主義教育を校風としていた成蹊小学校に勤務することは、小林にとって音楽教師として、新しい実践ができるかもしれないという希望を抱かせてくれるものだったのでないだろうか。子どもの唱歌に関する論考、音楽の歴史に関する論考、作曲した曲²⁴⁾などを成蹊学園の学内誌に投稿しながら、音楽教師として

経験を積み上げていく。

成蹊小学校という理想的な環境の中で音楽指導にあたっていたと思われるのであるが、小林は徐々に音楽教育の目指す方向性と現実の子どもたちの音楽の力について考えるようになる。

「私のなやみ かつては理想の音楽教師を夢に見てずるぶん勉強したつもりだった。(中略)初めて教壇に立ったのは明治44年、それから大正12年まで、成蹊今の成蹊高等学校の前身で暮した。最後の5年間は遂に私をして音楽教師たるに耐えられなくした。子供等は実によくのびのびと育って行く、教師さへよければ、いくらでものびるものだ……といふことを私に実感させてくれた、(中略)此のいくらでものびる子供を十分に指導するに足る器であるか……私は……なやんだ……その頃名のある音楽の先生達の授業は片っぱしから参観して廻った……僕だけが特にまづいのだとも思へなかった……而し之でよいのか音楽教育は……遂に私は私を是認することが出来なくなった。そして大正12年音楽教師を辞めたのであった。

何をなやんだか その頃、尋一²⁵⁾の女子8人同時にバイエルを始めた。半年も過ぎる頃には8人そろって上げて了つた、野邊地君²⁶⁾は3年だった、チェルニーの卅番の中どしどしと一曲一夜で上げて来る。上手といふのではないが間違ひではない、かくして卒業までにはまだ3年もある、音楽学校の豫科でもバイエルの上がらない人が1人や2人ではなかつた頃の事だ、なやまざるを得ない。更に問題は、子供達は紙と鉛筆を與へると自由に何やら書きなぐる、どうやら畫の始まりなので、綴方にしても自由選題とかいふて書き度い事を自由に書いて中々表現がうまい。(中略)何故音楽だけがいつまでも、ポップポポー……ハイッ ドレミファー……ハイをやつてあるのか。(中略)私が参観廻りを始めたのもその頃だ。そして策のないことを悟つた。遂に私は音楽教師たる事を辞したのだつた。私の心耳には出なほせ、出なほせというさゝやきがきこえる。とに角先進

國欧米を見てから……さう思つて日本を後にしたのであった、どうなるか見透しの付かない事であるが故に、目的をあいまいにして日本を癡つたというのが眞實である」(小林1934, pp. 18-20)。

成蹊小学校の子どもたちの中には、野邊地や井上園子²⁷⁾のように自宅にピアノがあり幼い頃からピアノを弾くことのできる環境にある子ども、チェルニー30番をもものともせず一晩で仕上げてくるピアノの技術の優れた子ども、両親がクラシック音楽に造詣が深く音楽的環境に恵まれている子どもなど音楽的に秀でている子どもが在籍していたであろう。唱歌指導中心の音楽の授業を行いつつも、退屈そうで生き生きとした様子が見られない子どもの様子に行き詰まり、魅力ある音楽指導とは何か、音楽を総合的に芸術として指導していくことが大切なのではないかということをも思案するようになっていったのではないだろうか。小林が音楽劇、オペレッタに取り組んだのは、そのことへの挑戦と考える。この音楽劇への取り組み、指導が、歌うことと演技すること、音楽に合わせて身体表現することなど多くの問題を小林に投げかけたと考える。しかし学校教育における音楽指導は、相変わらず唱歌指導一辺倒になっていることは、小林が目指す音楽指導とは相容れなかつた側面もあつたのかもしれない。

さらに、次のように述べている。

「私はその頃成蹊小學校の音楽教師をしてゐまして幼児の音楽性を觀察してから小學校の一年生の音楽の教授中に觀察した一年生の音楽性とはその間に實に大きな悲しむべき結果を見たのでした、幼児の音楽的感性は何時の間に失はれたものだらうか、それでも五六年頃の子供にくらべると、まだまだ生氣が溢れてゐるが、大きくなるに従つて此の感性と有機性が失はれて行く事に気がつき、そして私の才能ではそれをどうしてよいか全く見當がつかなかつたので、遂に私は音楽教師を一生の職業とするに耐えられなくなつて職を辭したのでした」(小林1932, p. 5)。

幼児期には誰もが持っている音楽的敏感性と有機性を育て伸ばすような小学生への音楽指導を模索し、名立たる音楽指導者の授業を参観し、その指導法の答えを見つけようとするが、日本の音楽教育界においては、叶わないと判断する。さらに、その当時行われていた幼児期の律動遊戯、表情遊戯を見直すことの必要性和幼児期の音楽教育法を構築することも大切なのではないかと考えるようになる。まさに小林の音楽教育者としての情熱は、成蹊小学校に勤務したことによって、前進することになったといえる。幼児期に持っている音楽的敏感性を小学生になっても、高学年になっても表現できる指導方法、音楽を系統的に指導していく方法、音楽を総合的に指導する大切さなどに気付くことになったのである。

小林は4年間勤務した成蹊小学校を退職し、新しい音楽教育法を求めてヨーロッパに旅発つことを決意する。自費で海外留学するにはかなり資金が必要であったことを考えると、成蹊学園に勤務したことによって岩崎の援助を受けることができ、留学することができたといえる。当然ながら小林は、成蹊学園の理事である岩崎の存在を周知していたと思われるが、岩崎の方は、成蹊小学校の子どもたちが発表した音楽劇、オペレッタを見て感心し、指導者の小林を評価したようである。小学校の音楽指導といえばほとんどが唱歌指導であった時代に、小林が成蹊小学校の子どもたちにオペレッタを指導したことは、総合芸術としての音楽を考慮した先駆的な試みだったのかもしれない。岩崎は、欧州へ勉強に行きたいと音楽教育への熱い思いを真剣に語る小林を見込んで、留学にかかる費用を全額提供したのである。しかも、どういうふうにお金が使われようと、岩崎は何も言わず支援した(佐野 1985, p. 85、小林 1978, p. 80) ようである。岩崎の資金援助を得て、小林は、ヨーロッパに2回留学している。成蹊小学校に勤務し岩崎という理解者、支援者と出会ったことは、日本の音楽教育界にリトミックという新しい指導方法を導くもともなったもといえる。

3. 学業と音楽教師の両立

小林に海外留学の決意をさせたと思われる人物の一人として真篠俊雄(以下真篠)の存在がある。真篠とはおそらく東京音楽学校で出会ったのではないかと推測される。

大正5(1916)年4月に小林は東京音学校乙種師範科に入学するが、真篠はこの時、東京音楽学校本科器楽部オルガン専攻の3年生であった。東京音楽学校では入学者に戸籍謄本の提出を求めている²⁸⁾ことから、おそらく小林の入学式、新入生歓迎会などの折に、群馬県出身の同郷者ということで面識を得たのではないだろうか。真篠との出会いによって、小林の音楽の世界は広がっていくこととなる。真篠の略歴を調べたところ次のようである。

明治26(1893)年11月9日、群馬県大野郡美土里村(現藤岡市)に生まれた。小林は同年の6月15日生まれであるから、二人は同年齢である。真篠は明治42(1909)年に群馬師範学校を卒業し、鬼石小(現藤岡小)の訓導を経て、大正3(1914)年に東京音楽学校本科器楽部(オルガン専攻)に入学している。東京音楽学校の本科は3年間から5年間在籍することになっていたが、真篠は4年間在籍し、卒業年度は小林と同じ大正6(1917)年3月である。本科を卒業した大正6(1917)年4月に、成城小学校に音楽専科教員として勤務するが、同時に東京音楽学校の教務嘱託としてオルガン指導を行いつつ、東京音楽学校研究科に進み2年間学び大正8(1919)年3月25日に修了している。

真篠が成城小学校に勤務することになったいきさつについて、成城小学校二代目主事として奮闘していた小原國芳²⁹⁾は次のように記している。

「音楽学校でオルガン科の出身。よくも、貧乏学校の訓導に、しかも、月給二十五円均一の学校に。当時、音楽学校出の相場は少なくとも六七十円でしろうに。沢柳先生³⁰⁾と知り合いだった群馬県の堀越豊平先生がスイセンなすったのだそうです。みな、就職論文を出させられそれについて

の口頭試問があったのだそうです。快活で、ジャン切り頭。しかも、やさしくて、堂々たる体軀。いの一番に採用された人らしいです（後略）」（小原 1967, pp. 190-191）。

東京音楽学校のオルガン科出身にもかかわらず、決して待遇的には恵まれてはいなかった成城小学校に勤務をしていた真篠に対して、小原は少し懐疑的だったのかもしれない。真篠の授業を参観することによって、その指導力、音楽的資質の高さに魅せられ絶対的信頼を置くこととなる。真篠は紙屑カゴやハタキ、ヤカンや皿のいくつかを持って入ってきて、様々の音を叩いては子どもたちにドレミファとあてさせて音感訓練をやったり、紙屑カゴをハタキで叩きながらショウショウ寺の狸踊りの歌を躍らせながら歌わせたり、三年生くらいの子どもに何か題目を出しては作曲をさせ、いい曲を採用しては黒板の五線の上に書いたり、楽典の理論を織り交ぜながら曲をまとめ上げたりたりなど今日でも質の高い音楽指導と思われるような授業を展開していたのである。

大正 9（1920）年、真篠はパイプオルガンの技能を磨くために職を辞し、大正 13（1924）年までベルリンに留学する。帰国後、東京音楽学校教務嘱託としてオルガン指導を続け、昭和 7 年には同学校教授となりオルガン、音楽理論、和声論を担当している。この時には出身地を群馬から東京に変えている。その後、真篠は東京学芸大学、小原に迎えられて玉川大学など、大学教育においてオルガン指導、オルガン教育、オルガンテキスト製作、音楽理論の指導などに尽力する。

小林は乙種師範科卒業した大正 6（1917）年 4 月、さらに唱歌の技能を磨くため、選科の唱歌専攻に進み、小學校の音楽教師をしながら仕事と勉学の両立に励んだ。これは小林自身の意欲と向上心が旺盛であったことに加えて、真篠が仕事と勉学の両立に取り組んでいた姿から何らかの影響を受けたのではないかということが推測される。

ベルリンに留学した真篠は、ヨーロッパの音楽文化の高さ、日本の音楽教育との違いなどを小林

に伝えていたのではないだろうか。小林は真篠が留学したことによって、強く海外に目が向くようになっていたように思われる。

大正 12（1923）年 3 月、成蹊小学校を退職した小林は、3 か月後の 6 月にヨーロッパに旅発つ。この時は、どこの国で何を学ぶということがはっきりしていたわけではなかったようであるが、ベルリンに真篠が留学中であったことは心強かったといえよう。小林は精力的に調査活動を始める。

「大正十二年の七月、ジュネーヴで新渡戸博士にすゝめられて始めて（ママ）リトミックを知った³¹⁾、同年九月ベルリンで始めて（ママ）石井漢氏に會つた、漢氏もリトミックが一番良いとすゝめられた、眞篠教授にもたいへん御世話になつた、ボーデーの表現體操を見付けたのも此の時だつた、實はベルリンに着くと直に小學校の先生と幼稚園の先生を一人づゝ研究の顧問に雇ふた、そして音楽と遊戯の最もよい學校を各五つづつ選ぶやうに……とそして一々案内してもらつた、（中略）これはどうだ！とばかり舞踊學校から體操學校まで案内してくれた。そして最後に出たものがボーデーの表現體操だつた、之はよい……私はそこに一週間通ひつゞけた、而し之を小さい子供達に如何にして適用されるか……と考へた時如何にも程度が高過ぎる……さう思つてあきらめた。そうしてパリーに出た、漢氏のすゝめに従つて、歌手小森讓君のお兄君をたよりにリトミックの學校に入學して正式にリトミックの修業を始めた。初めの豫定では兎も角欧米を一巡してから最もよい處に逆もどりしてねりなほす……といふつもりであつたが、リトミック學校に入つて一ヶ月たち半年たつ間にもう之でよい、理想的だと決定してよいと思ふ様になり遂々そこで一年を過して了つた。之でよいと思ふと急に實驗して見たくなり、矢もたてもたまらなくなつて歸朝した。眞篠教授の御世話で丁度成城で實驗させて呉れるといふので成城入りをしたのが大正十四年、かくして數年間の實驗の結果はリトミックは實に音楽教育ばかりではない實に様々な方面に有意義なる展開

をなす事がわかった。(中略) 同時に又いくらかの不完全をも感じないわけには行かなかつた。それ等の解決に逼られて昭和五年再び渡歐せねばならなくなつた」(小林 1934, pp. 20-21)。

音楽に純粋に反応する幼児期、特に「5、6才頃の音楽教育は一生の中で最も重大なもの」(小林 1932, p. 5) と考えていたことから、5、6歳の子どもたちにはどんな音楽指導法が良いのかを見つけ出しという意志を強く持って渡欧したことが読み取れる。その根底には、唱歌教育、唱歌指導に偏っていた日本の小学校音楽教育に疑問を持っていたこと、音楽と舞踊、音楽と身体表現のかかわりが切り離されている日本の音楽指導の在り方へのもどかしさがあったのかもしれない。このことから、「一般に日本では舞踊が体操の様に思はれてゐるがリトミックは純粋なる音楽教育改革案である」(小林 1934, p. 21) という主張がなされたといえよう。納得できる音楽教育法に出会うまでは、妥協をしないで探したそうとしたことは、音楽教師としての誇り、理想の高さ、情熱、意思の強さが伝わってくる。

また、初めからリトミックを習得したいと決めていたわけではなく、もっと良い方法はないかと求め続けていた様子も伺える。結果的にリトミックで良いと判断するものの、再度渡欧することや後の著述³²⁾をみても決してリトミックの全てを良しと受け止めていたのではないことが示されている。

真篠に世話になったという小林の記述から、ベルリンの幼稚園や小学校見学するにあたっての手配、幼稚園と小学校の教師を一人ずつ紹介してもらふことなど、真篠を信頼し相談したり依頼したりしていたのではないかということが推測される。真篠は、小林の初めてのヨーロッパ留学を支え、小林の意向を叶えようと力を貸していたことは明らかである。

帰国後小林は真篠の推薦で当時成城小学校主事であった小原國芳と会い、大正 14 (1925) 年 5 月の成城幼稚園設立にかかわることとなる。

真篠はオルガン研究、小林は音楽教育研究と目指していた方向は異なるものであったが、音楽という共通の土台をとおして、よき友人であり理解者であったといえる。それは、小林が真篠の後を引き継ぎ成蹊小学校に勤務したこと、留学の決意と留学中の音楽面での援助、真篠の推薦で成城小学校、成城幼稚園に勤務しリトミックを実践する機会を得たことなどの経緯から確認できる。

4. 成城小学校、成城幼稚園からトモ工学園へ

小学校の音楽教師時代の教え子のなかには、成蹊小学校で指導し、後に日本を代表するピアニストとなる野辺地や井上などがいる。

リトミック普及者、指導者として尽力するのは成城小学校であるがその一端は、学園便りの音楽と劇の会の報告³³⁾に示されている。この報告の一部から三部までは、《雀たづねて：海野厚作詞、中山晋平作曲》、《汽車：菊池訳：ドイツ曲》《あしぶみ：北原白秋作詞、山田耕筰作曲》、《赤とんぼ：三木露風作詞、山田耕筰作曲》などの歌をクラスごとに発表し、ピアノ独奏を二人が行っている。

「四部はリトミック。小林さんが父兄方に説明しながら進行させてくれたので、今迄わかつてゐたリトミックの深い意味が一層はつきりされた。『リトミックは音楽教育としては最も基礎的のものでして、目的はリズムによつて人間の心と體の調和を図り實現力と想像力の調和を計るためであります。……今迄音楽の成績の善し悪しは耳にのみ關すると言つてゐたがさうばかりでない事がわかりました。耳を通して神経中樞に音を傳へる事は誰にも出来る……たゞそれを復び出す事が出来ないのです。復び表さうとする時、故障があつて變つて外にとび出る、頭で計劃された事は肉體を通して外に表現されねばならぬが、神経中樞から肉體に出る時、肉體に故障があり表現する力が缺けてゐた時音楽の妨げとなるのです』と言ふ話し出しであつた」(相沢節 1928, p. 84)。

小林は、留学で学んだリトミックを成城小学校で実践することができ、成城幼稚園には、まさに

産声を上げた時から主任としてかわり、その運営を任されていた。成城幼稚園設立当初は、園舎もなくかなり苦労したようであるが、幼稚園教育を理想的なものへという熱意、音楽教育においてリトミックを普及するという情熱が衰えることはなかった。成城学園に勤務しながら、リトミックに関する論文や報告書を多数執筆していることからこのことはうかがえる。

そして昭和12(1937)年3月成城幼稚園を退職し、同年4月に、小林自らがトモエ幼稚園とトモエ学園(小学校)を設立する。園舎もない仮住まいからスタートした成城幼稚園での実績、留学で学んだリトミックを実践した成城小学校での経験が、小林に自分の教育観を実現する学校設立と幼稚園設立の思いを抱かせたといえよう。子どもを自然の中で自由に育てるという理想に燃え音楽教育にとどまらず教育者として校長として子どもの教育に情熱を傾けることとなる。この時の教える一人が黒柳徹子(以下黒柳)である。黒柳は著書のなかで、トモエ学園での体験について、講堂にテントを張って野宿したこと、畠の先生に教わったこと、等々力溪谷で飯盒すいさんをしたことなど子どもの心をつかむ楽しい企画がたくさんあったことを記している。また、小学校一年生の子どもだった自分と、四時間も向き合っただけ話を聞いてくれた校長先生について、そしてどの子どもにも包容力にあふれた接し方をしていた校長先生について記している(黒柳1981)。

小林のリトミック指導についても、いくつか記している。たとえば、「ふつうの小学校と授業方法が変わっているほかに、音楽の時間が、とても多かった。音楽の勉強にも、いろいろあったけど、中でも「リトミック」の時間は、毎日あった」(1981, p. 107)。

「講堂の小さいステージの上のピアノを校長先生が弾く。それに合わせて、生徒は思い思いの場所から歩き始める。(中略)自由に流れるように歩くのだった。そして、音楽を聴いて、それが“二拍子”だと思ったら、両手を大きく指揮者のように上下に振りながら、歩く。(中略)「足の

親指をひきずるように、体を楽に、自由にゆすれる形で、歩くのが、いい」と先生はいった。(後略)」(1981, p. 109)。

「生徒ははくぼくを持って講堂の床の思い思いの場所に陣取って自由な姿勢で準備する。校長先生がピアノを弾く。そうすると、みんなは、その講堂の床に、先生の弾いている音楽のリズムを、音符にするのだった。(中略)音符といっても、五線を書く必要はなく、ただリズムを書けばいいのだった。しかも、それは校長先生とみんなまで話し合っただけで決めた、トモエ流の呼びかたの音符だった。(中略)♪はハタ(旗のように見えるから)、♩はハタハタ、♩は黒、(中略)床に、はくぼくで描く、というのは、校長先生の考えだった(後略)音符の授業が一区切りすると、校長先生が下りてきて、ひとりずつのを見て廻る、というやりかただった。(中略)そして「いいよ」とか「ここはハタハタじゃなくて、スキップだよ」とか、いってくださった。(中略)どんなに忙しくても、人まかせにすることは、絶対になかった。そして、生徒たちも、小林校長先生じゃなくちゃ、絶対に、面白くなかった」(1981, pp. 234-236)。このような黒柳の記述から、小林はリトミック指導を、自分が校長を務めるトモエ学園の小学校の子どもたちと、心から楽しみながら行っていたのではないかと思われる。紙という一定の空間ではなく、子どもにとって自由にのびのびと好きな場所に移動できる講堂の床に、白墨で音符を書くという小林の発想は、黒柳にとって忘れられない楽しい活動として心の奥深くに刻まれた。校長として、教育者として、小林がもっとも充実していた時期といえるのではないだろうか。ただそれは長くは続かなかった。昭和20(1945)年空襲によりトモエ学園は焼失してしまい、昭和21(1946)年4月に小学校は廃校されることとなる。トモエ幼稚園は存続させることになるものの、小学校で黒柳たちと深くかかわったように幼稚園の子どもたちと接する小林の姿はあまりなかったようである。

黒柳がトモエ学園での生活、出来事を鮮明に覚

えていて著書にしたことは、黒柳の記憶力が優れているというのはもちろんのこと、小林との一つ一つのかかわりが心に温かく強く印象付けられたからともいえよう。校長先生としての小林の教育は、子どもの心にまっすぐ響く、愛情あふれるものであったと考える。

5. 国立音楽大学附属幼稚園長・小学部部長時代

昭和24(1949)年、国立中学校、国立音楽高校を設立することになった折に、中館はリトミック指導者として小林を招聘する。さらに翌年4月、国立音楽大学に教育音楽学科を設置するにあたって講師として依頼したり、7月に附属幼稚園を設置するにあたり、園長に据えたりする。これらのことは第1節で述べたように、中館と小林は大正4年頃に出会って以来、交流を持ち続け信頼関係が築かれていたことを示している。

早坂禮伍(以下早坂)が記憶する小林との出会いは、昭和28年国立音楽大学附属幼稚園の卒園式のようなものである。早坂の略歴に触れながら小林とのかかわりを確認したい。早坂は大正2(1913)年仙台市に生まれている。仙台市立東二番町小学校に入学したが、その後東京で過ごし、旧制台北一中、旧制台北高等学校、東北帝国大学法文学部国文科を卒業、札幌の北星学園、東京女子大学、専修大学で教鞭を取っていた。専修大学在職中に宮城学院学院長の就任を懇願されて専修大学を退職する。昭和54年(1979年)4月、第5代宮城学院学院長として、二期8年間在職する。その間は、仙台市東三番町のキャンパスから同市桜ヶ丘の新キャンパスに移動するという大きな転換期であった。創立百周年行事、軽井沢山荘の改荘など新しいキャンパスでの宮城学院の基盤を精力的に築きながら、キリスト教精神をふまえた宮城学院の教育の発展のために尽力した³⁴⁾。

早坂が専修大学に勤務していた時の住まいは、国立(くにたち)にあった。居を構えた昭和25年頃の国立は、まだ雑木林が林立し開発が進んでいなかったものの、町づくりは自分たちの手で行って、こうと夜な夜な駅前のお茶店に集まって熱

く語り合う人々がいた。メンバーには、国立音楽大学学長の有馬大五郎、同大学理事長中館、ティンパニー奏者小森宗太郎、ピアニストのレオニード・クロイツァー、早坂などがいた。コーヒ一杯で天下国家を論じたり、夢を話し合ったりしていたようである。昭和27(1952)年に国立は文教地区に指定されるが、市民運動の大きな力とともに教育委員長であった早坂の力が牽引したと思われる。

早坂は昭和26年、長女を国立音楽大学附属幼稚園に入園させる。小林は初代幼稚園長としてすでに活躍中であったが、早坂が小林と初めて会ったのは、長女が幼稚園を卒園する時であった。この頃、国立の教育委員長としても活躍していた早坂は、中館から「小学校を作りたいがどうだろう」と持ちかけられる。父親として長女を受け入れてくれる小学校を思案していた時であり、国立の教育委員長という立場からも私立の小学校は是非欲しいということで、大賛成した(佐野1985, pp. 289-290)ようである。こうして国立音楽大学附属小学校は昭和28(1953)年設立される。小林は小学校部の部長ともなり、それからは早坂と小林が会う機会は増えていく。早坂が晩年の小林と親しかったことを知った佐野は、小林の話を聞きたいと仙台の早坂宅を訪問している。その際、早坂は次のように語っている。

「小林先生を私が最初に意識したのは、娘が小学校へ入って、まだ小学校の校舎が出来ていなくて大学の片隅で授業をやっている時、大学生の生徒と、小学生の生徒が20人位ずつ一緒になってリトミックをやっているのを見た時でした。見ているとなかなか面白くて小学生はすぐ出来るのに、大学生がちっとも出来なかつたりして、非常に興味をそそられました。この時小林先生がこう言われたのを覚えていますよ。『手を動かすとピアノが鳴る。ピアノが鳴ったら手を動かす。こういうように逆にしてみると体を動かしたら音が出る、音が出たら体が動く。』というように考えると体で音楽が分かる筈ですね。これがリトミックですよ』本当に今になってみると中館先生も、小学

校へ集まって来られた先生方も、皆さんが小林先生の教育理念に惹きつけられて小林先生の考えを体現されていたんだなあ、というのがわかりますね。……」(佐野 1985, pp. 290-291)。

「私は小林先生を真似しているんです。それは小学校の運動会で、赤組、白組が細長い校庭で一生懸命競争した後、最後の得点を発表して、白組が勝つと、小林先生はこうおっしゃったんです。『今日は白組が勝っておめでとう』子供達は一斉に拍手をします。『赤組は負けたけど、赤組のおかげで白組が勝ったんだから、赤組さんありがとう』子供達は前にも増して盛大な拍手です。私は今、宮城学院で、幼稚園、中学校、高校と運動会の最後にあいさつさせられます。幼稚園、中学校では、毎年、必ず小林宗作先生を思い出して言うのです。『今日は赤組が勝っておめでとう。白組は負けたけど、白組のおかげで赤組が勝ったんだから、白組さんありがとう』必ず湧き上がる拍手の中で、“私はトットちゃん教育の真似をしている。何てすがすがしい嬉しさなんだろう”とその度に、小林先生の思い出に、ひたるのです。……」(佐野 1985, p. 293)。

早坂は佐野から 30 分という申し入れを受けて会見することになったのに、小林との楽しい思い出話を佐野に語るうちに、4 時間が経過していたことを記している(早坂 1988, p. 233)。子どもの心に寄り添った教育者小林の姿に影響を受けた早坂は、宮城学院理事長として、幼稚園児や中学生、高校生、大学生とのふれあいのなかに、その一端を実践していたのである。

おわりに

音楽教師として教育者として小林宗作がどのように歩み、深まっていったかについて、中館、岩崎、真篠、黒柳、早坂との出会いとかかわりという視点から考察を行った。小林についての研究対象として、中館、真篠との出会いとかかわりについて踏み込んで取り上げたのは、本稿がはじめてであろう。

中館、真篠との出会いがなければ、また岩崎の支援がなければ、小林はどのような人生を歩むことになったのだろうか。この出会いが小林の音楽を愛する気持ちを刺激し、音楽指導に情熱を傾けさせる原動力ともなって音楽教師として教育者として成長させたと考える。さらに、東京音楽学校師範科乙種を卒業後、同大学選科唱歌に 5 年間在籍し、小学校教員をしながら学んだことが明らかとなった。これは小林が美声の持ち主で、唱歌、歌うことを得意としていたことを裏付けるものである。

成蹊小学校時教員時代の考察からは、(1) 小学校の音楽教師として、唱歌教材に片寄りがちな指導内容を変えたかった(2) 幼児期に誰もが持っている音楽的感性を成長してもそのまま伸ばし生かすための指導法を探っていた(3) 音楽教育に新しい指導法を導入したかったという 3 つに集約できるのではないだろうか。小学校の音楽指導を充実させるためには、幼児期の音楽指導の見直しが必要であり、そのために、リトミックの試みや普及活動を精力的に行い、幼児教育の大切さを訴えていたように思われる。

黒柳と早坂とのかかわりからは、校長として教育者として子どもの心に寄り添い自らも楽しみながら、心の通う教育を実践していたことを確認した。

本稿は小林と 5 人の出会いとかかわりから、音楽教師として教育者としての小林の深まりについて全体像を把握した。これまで小林は幼児教育分野におけるリトミック教育の創始者、普及者という捉えられ方が大勢を占めていたが、小学校音楽教師としてスタートしたことを鑑みると、音楽教師としての実践や教育観から、教材や音楽指導のあり方への示唆を得るものも多いと考える。今後さらに資料収集を進め、研究を深めていきたい。

註

- 1) スイスで活躍したダルクロワズによって提唱された音楽指導法。リズム、ソルフェージュ、即興演奏という 3 つ

の柱を基本としている。

- 2) 例えば、松坂仁美 (1987) 「幼児教育へのリトミックの導入—小林宗作と天野蝶を中心として」『美作女子大学・美作女子短期大学部紀要』32、水野恵子 (1988) 「大正期のリズム教育について—小林宗作のリトミック教育—」『愛知県立大学文学部論集』37。福元真由美 (2004) 「1920-1930年代の成城幼稚園における保育の位相—小林宗作のリズムによる教育を中心に—」乳幼児教育学研究第13号などがある。また、小林自身の論考『総合リズム教育概論』、『幼な児の為のリズムと教育』などは『大正・昭和保育文献集』第4巻に所収されている。
- 3) 黒柳徹子が子どもの頃を回想し著した書で、1981年刊行以来2011年には第97刷を重ね、35ヵ国で訳されている人気の本である。扉には「この本を、亡き、小林宗作先生に捧げます。」と記してある。
- 4) 佐野和彦は横浜高商 (現横浜国立大学経済学部) 入学し合唱部に入部、バッハの音楽に魅了されて中退。東京芸術大学音楽学部楽理科に入学、卒業後テレビ朝日 (当時の日本教育テレビ) に入社、テレビ番組の制作現場に入る。大学の講師、子どもへの音楽指導を行った。1976年2月2日からスタートし、現在も続いている『徹子の部屋』の当初のチーフ・プロデューサーとして活躍した。子どもへの音楽指導を行いながら小林宗作については、資料を集め10年間くらい研究を続けていた。
- 5) 『トットちゃんの先生小林宗作抄伝』は、佐野和彦によって小林宗作の生い立ち、論考などを含む全体像がまとめられた著書で、小林について最も詳細に記された書である。
- 6) 小林恵子の論考は、小林宗作が成城幼稚園において日本ではじめてリトミックを教えたことを中心にまとめているが、成蹊小学校時代、新渡戸稲造との出会いなどにも触れている。
- 7) 訓導は、第二次世界大戦前の日本の教育制度における旧制小学校の正規の教員の称。現在の学校教育法教諭と同等の職である。
- 8) 小学校において特定の教科のみを担当する選科担当教員は、戦前においては、専科教員として免許制度上定められていた。明治33(1900)年の小学校令で、全教科担任者を本科正教員として、図工、唱歌、裁縫などの教科を専科教員として位置づけていた。小林宗作は私立の成蹊小学校においても唱歌教員として採用になっているが、自身では音楽教師という言葉を用いているので、本稿では音楽教師を用いることとした。なお現在は、一人の教員が全教科を担当し、一つの学級の全ての児童に責任をもつ学級担任制が原則である。しかし教員によっては教科指導に得意・不得意があり、すべての教科に高い指導力を期待することは難しいことから、技能教科に属する、音楽、図画工作、家庭、体育などの特定の教科を担当する教員を置いているのが普通である。
- 9) 小原國芳 (1928) 「わたしたちの幼稚園」『教育問題研究全人』第21号 pp. 32-39. の中で「主任の金子君 (元的小林君) に…」と記していることから、成城幼稚園に勤務していた昭和3年頃、金子家に養子入籍し、小林宗作から金子宗作に変えたようである。しかし、すぐに小林宗作と名乗るようになっていく。
- 10) 佐野によると、次兄は高崎師範学校卒業と記している (1985, p. 42) が、群馬県立図書館に調査依頼をしたところ、高崎師範学校は明治9年8月から明治11年3月までは存在していたが、その後前橋に移り群馬県師範学校となったとの回答を得た。さらに佐野は次兄長十郎と記しているが、塚田長重郎 (旧姓: 小林) の名前が、昭和35年に出された後継である群馬県立大学の同窓会誌の卒業生名簿に掲載されていることが判明した。
- 11) 明治19年 (1886年) 4月9日小学校令 (第1次) の公布により尋常小学校4年間 (無償)、高等小学校4年間 (授業料徴収) が設置された。小林はこの第1次の時代に高等小学校に入学し卒業している。
- 12) 佐野 (1985) の資料から下仁田小学校での音楽会のプログラムの調査を行ったが、下仁田小学校、群馬県立図書館、国立音楽大学附属図書館にも存在しなかった。おそらく東京音楽学校で学ぶ学生もしくは教師が、ピアノ演奏や独唱、ヴァイオリン演奏などを行ったものと思われる。
- 13) 『東京音楽学校一覽 自大正五年至六年』の學則によると、甲種師範科は満16歳以上、師範学校中学校もしくは修業年限4カ年の高等女学校本科を卒業し当該学校長の推薦を受けた者が入学試験を受ける資格があった。修業年限は3カ年あった。一方、乙種師範科は、高等小学校を卒業した者で、修業年限は1カ年であった。
- 14) 中館は遠野市の名誉市民となっていることから、遠野市および岩手県立図書館に調査を依頼したが、中館が名誉市民に選ばれた経緯、来歴、上京時に関する資料は残さ

れていないとのことであった。ただ、昭和53年に市民文化賞を受賞しており、その時の授賞理由は、国立音楽大学（くにたちおんがくだいがく）を設立、西洋音楽の普及を行った、昭和52年に遠野で特別演奏会を開き、その売上げを市教育文化財団へ寄付し、市民文化への貢献を果たした、となっていることは判明した。

- 15) 中館についての資料は少ないため、国立音楽大学に調査依頼を行った。国立音楽大学校史編纂準備室より、回答を得たものである。
- 16) 平成24年度全日本音楽教育研究会大学部会部会大会国立音楽大学プロジェクト研究『音楽を学ぶ大学生のキャリア教育』の資料 p. 9.
- 17) 『東京音楽学校一覧 自大正五年至六年』近代デジタルライブラリー、国立国会図書館
- 18) 上掲書によると、音楽教授法は第3学期1と記されていることから、1、2学期は行われていなかったようである。
- 19) 『東京音楽学校一覧 自大正六年至七年』學則第四章 學科目及其課程 第二十條には「選科ノ學科目ハ本科ノ主科ニ属スルモノ及箏ニ限ル 但シ同時ニ三學科目以上ヲ併修スルコトヲ許サス」とある。専攻する科目を学ぶことに特化した学科であることが読み取れる。小林が選科に入学した大正6年には唱歌、ヴァイオリン、ピアノ、オルガン、セロ、箏専攻の入学者が471名いる。本科65名、研究科35名、乙種師範科18名、甲種師範科84名と比べてかなり多い人数である。
- 20) 成蹊小学校90年の歩み『すもも』に、小学校が設置された大正4年（1915年）から今日までの教職員一覧が掲載されている。それによると、大正8年（1919年）年度の1年間、真篠俊雄が唱歌講師として勤務したこと、大正9年（1920年）から小林宗作が唱歌教員として勤務したことが記されている。
- 21) 成蹊小学校の創立当時から行われているものに凝念と心力歌があり人格教育を象徴している。凝念は手をかさね、左右の親指をあわせ桃の実の形をつくり黙想する。
- 22) 岩崎は英国留学それに対して、日本は教科書の詰め込み主義で自主的精神が足りないことを痛感し、官庁の制約を受けない理想的な教育のできる学校設立を考えていたようである。（<http://www.seikei.ac.jp/gakuen./struct/history/reimeiki.html>）
- 23) 東京フィルハーモニー会については、東京音楽大学ホームページ大学概要に次のように掲載されている。東京音楽大学の前身である東洋音楽学校は明治40年に設立され、翌年には管弦楽部を設け、明治43年に英国大使夫妻、岩崎小弥太夫妻の後援を得て、ロンドンのロイヤル・フィルハーモニーにならい、東京フィルハーモニー会が設立された。このオーケストラは山田耕筰に引き継がれ、新交響楽団、現在のNHK交響楽団へと発展し、クラシック音楽の普及に大きく貢献した。三菱グループのホームページによると、英国大使を誘ったのは岩崎のようである。
- 24) 成蹊学園史料館には、子どもの唱歌に関する「子供の唱歌の今と昔（1）（2）」『母と子』、音楽の歴史に関する「音楽の歴史」『子鳩』の論考、作曲した《鯉鱈の歌》などが残されている。
- 25) 尋常小学校一年生のこと
- 26) 野辺地瓜丸は、昭和前期から中期にその名を残す伝説的ピアニスト。フランス奏法を戦前の楽壇にいち早く紹介し繊細で可憐なタッチ、美しいピアノニッシモで多くのファンを魅了した。後に勝久と改名する。
- 27) 井上園子は昭和前期のピアニスト。11歳でモーツァルトピアノ協奏曲第23番を独奏した。国際ピアノコンクールに日本人として最初にエントリーした。父は眼科医。
- 28) 『東京音楽学校一覧 自大正四年至五年』學則第六章 入學、休學、退學 第廿九條には、「本校ニ入學セントスル者ハ第一號及第二號書式ニ據リ入學願書ニ履歷書及戸籍謄本ヲ添ヘ差出スベシ」とある。その他、入学を許可する者には、品行善良ということも求められていた。
- 29) 小原國芳は成城小学校主事、のちに玉川大学を創立し第3代学長となる。日本基督教団のクリスチャンであった。詳細は『小原國芳全集』を参照されたい。
- 30) 沢柳先生とは沢柳政太郎（以下沢柳）のことである。沢柳は文部官僚時代に小学令を改正し修業年限4年間から現在の修業年限6年間の課程に改正したり、旧制高等学校を増設したりしている。東北帝国大学初代総長、京都帝国大学総長などを歴任後、陸軍士官学校の予備校であった成城学校の校長に就任。新教育の実験校として大正6年4月成城小学校を創立した。小原國芳は沢柳に見出され成城学園の運営を任されることとなった。
- 31) 新渡戸稲造は当時、国際連盟事務局に勤務しており、欧米の事情を把握するには、新渡戸を訪ね教を乞うことが良いと小林は考えたのかもしれない。詳細は板野晴子

2011「小林宗作によるリトミック移入と新渡戸稲造による示唆」『ダルクローズ音楽教育研究』Vol. 36. を参照されたい。

- 32) 『総合リズム教育概論』の補足で小林は次のように述べている。「力の解放—ダルクローズ氏のリズム体操に就いては、肉體運動に當つて筋肉の力の解放といふことが完全に行はれてゐないのである。(中略)理論として又基本練習として一應は訓練されるのであるが、私が見たところでは、ダルクローズ先生自身に於いても、リトミック学校教授及上級生徒の実際を見て、不徹底であると思われる」(pp. 195-196)。さらに、社交ダンスは狂的悦境をさまよふのに、表情遊戯、律動遊戯、體育ダンスもそれが無い。リトミックにもそれがなかった。ところがボーデー氏の表現体操は一目見て全興味が集中されたこと、音階練習についてもジェグルジュ式という新しい研究がダルクローズ式に勝る幾多の美点があること、ピアノ即奏法は、表現においてタイプライティングであると思うと記している (pp. 196-198)。
- 33) 大正9年から昭和8年にかけて成城学園では、学園職員による研究論文や実践記録を収録した『教育問題研究・全人』を発刊している。その内容には学園便りが含まれる号もある。
- 34) 早坂の父親早坂哲郎が、明治21年創立間もない宮城女学校の数学と修身の教師として赴任しており、姉たちも宮城女学校出身ということで宮城学院については、思い入れが強かったように思われる。学院長という役職の依頼があり、父親の足跡をたどることも含めて、相当の覚悟で赴任したようである。

引用・参考文献

- ・相沢節 (1928)「音楽と劇の會」『教育問題研究全人』第22号pp. 82-86.
- ・小原國芳 (1967)「真篠敏雄(ママ)兄」『小原國芳自伝(2)』玉川大学出版部pp. 190-191
- ・黒柳徹子 (1981)『窓ぎわのトットちゃん』講談社
- ・小林恵子 (1978)「リトミックを導入した草創期の成城幼稚園—小林宗作の幼児教育を中心に—」『研究紀要』第13集国立音楽大学 pp. 75-93.
- ・小林宗作 (1932)「幼児の音楽性」『いとし兒』日本兩親再教育協会 先進社
- ・小林宗作 (1934)「欧米音楽教育界の相」『学校音楽』2巻8号 共益商社書店
- ・小林宗作 (1935)「綜合リズム教育概論」『大正・昭和保育文献集』第四巻
- ・小室弘毅 (2005)「中村春二の教育思想と凝念法」『研究室紀要』東京大学大学院教育学研究科教育学研究室第31号 pp. 23-33.
- ・坂本麻実子 (2008)「東京音楽学校における唱歌教員養成の終焉：乙種師範科の生徒募集中止をめぐって」富山大学人間発達科学部紀要、2 (2) pp. 13-18.
- ・佐野和彦 (1985)『トットちゃんの先生小林宗作抄伝』話の特集
- ・成蹊学園六十年史 (1973) 中村春二「成蹊主学校設立趣旨」pp. 208-209.
- ・東京音楽学校編 (1915)『東京音楽学校一覽 自大正四年至五年』
- ・東京音楽学校編 (1916)『東京音楽学校一覽 自大正五年至六年』
- ・東京音楽学校編 (1917)『東京音楽学校一覽 自大正六年至七年』
- ・東京音楽学校編 (1918)『東京音楽学校一覽 自大正七年至八年』
- ・東京音楽学校編 (1919)『東京音楽学校一覽 自大正八年至九年』
- ・東京音楽学校編 (1920)『東京音楽学校一覽 自大正九年至十年』
- ・東京音楽学校編 (1921)『東京音楽学校一覽 自大正十年至十一年』
- ・早坂禮伍 (1988)「百年の日のために」『我苦因鳥の歌』宮城学院同窓会
- ・福嶋省吾 (2003)「日本におけるリトミック教育の歴史的概観」『リトミック研究の現在』開成出版pp. 29-30.
- ・『宮城学院広報』(1979) 22号